

例会抄録

江戸時代の家庭医学・看護書『病家須知』の現代語訳
に取り組んで

中村 節子

二〇〇一年の看護史研究会例会で「今までの学習会で欧米の医療状況ばかりを学習してきた。ナイチンゲールの看護やイギリスの社会状況等によく理解できた。しかし、日本独自の看護はなかったのだろうか」という疑問であった。そんな中で、二〇〇六年に研究会が丁度発足五十年目にあたるので、この際、日本の近世前後の看護の状況をもっと詳しく知る必要があるのではないかとということになった。会の先輩で『看護学生のための日本看護史』を出版する際に関わった仲間の一人が近世最高の看護書といわれているが、詳細はまだわかっていない『病家須知』八巻八冊の原本を持っていることが判り、この際思い切つて会の五十周年記念に全巻を現代文に訳してみようと話が出され決定した。そして二〇〇二年から本格的に取り組むことになった。

研究の取り組み方針として左記の六点を決め取り組んだ。
一、適切な変体仮名読みの指導者を身近な場から見つけて指導して頂き、「読み」を始める。

二、一応の分担を決め、一つの巻を二〜三人で受持つて共

同で読み、討議し集団の力を強める。

三、著者、平野重誠の人物像を知る。

四、日本の漢方について学習する。

五、江戸時代を庶民の生活を基礎にして、人と学問を生み出す時代背景を捉える。

六、『病家須知』翻刻・現代語訳の出版社の決定をする。

まず、方針一は人が見つからず、メンバーの中で多少古文等の学習経験がある者を主に二〜三回教えていただき、後は各自の努力で進めた。江戸がなを現代文に読み下すために、いろいろな辞書と首っ引きで悪戦苦闘が続き、時には投げ出したくなる時もあった。しかし平野重誠の文字は達筆で、漢字には読み手に判りやすいように意味ふり仮名のルビがつけてあるため、なんとか救われ二〇〇六年九月全巻完成出版することが出来た。

著者、平野重誠は一七九〇年(寛政二年・月日は不明)江戸両国に生れ、薬研堀(現在の東京都中央区日本橋二丁目)で開業。一八六七(慶応三)年十一月十六日、七十八で死去。名前の他にいろいろな別名を持っている。

家系は曾祖父は伊勢安濃津(現在の三重県)の武家で、祖父から医家となり、父・本人・子の元周(五代目婿養子)までで医家は終わっている。重誠は三人兄弟の長男で、下二人の弟も医者である。幼少の頃から父の手伝いをしながら医を学ぶと共に、医学館督事の多紀元簡にも師事している。妻(桂)との間に一男二女をもうけるが、長男は幼い

ときに亡くなり、妻とは五十五歳で死別している。町医をしながら、四十歳頃から執筆活動を続けている。その著書数はわかつてはいるものだけでも五十数巻五十数冊ある。

その著書の中の処女作である『病家須知』は一八三二―三四(天保三―五)年、重誠四十二歳の時から書かれたもので八巻八冊(三五四頁からなる和綴本)で構成されている。

『病家須知』とは「病人を抱えた家の者がよく知っておかねばならないこと」という意味で、別名「病家心得草」(一―六巻)と言つて、当時の一般庶民向けに書かれた家庭医学・看護書と最後の七―八巻は『坐婆必研』、別名『ことぶき草』という産婆(現在の助産師)むけに書かれた専門書である。

第一巻は養生の心得、第二巻は食物の摂り方病状別の食物の適否・摂取法、第三巻は小児養育の心得、第四巻は婦人病について、第五巻は梅毒・肥前瘡・陰癬・傷寒・時疫・痢病・脚気と伝染病について、第六巻は食中毒・毒物中毒・昏睡・卒中・眩暈・癩癩などの発作・鼻血・吐血・火傷・咬傷・金瘡打撲・捻挫脱臼など急症の処置・処方について第七・八巻は産科を対象にしたものである。産科は近世医学の中でも水準が高く、重誠も胎児を釣で引き出すことの危険性の指摘や、産婦の精神的・肉体的負担の大きい産椅子の廃止の主張など、医学資料としても価値が高いと思われる。現代文に訳してみても、『病家須知』はこれまでの看護法を集大成した本としては日本で最初の本であると

言えるし、幼少の頃から父親について学んだ漢方を中心とした医療の実践を通して学んだものや、自ら工夫して効果を得た看護法を書いている点では彼独自のものでもある。

「日本を知ることは江戸を知る」ことであるといわれる。それは今日の日本の暮らしや文化の原型が江戸時代特に後期に出来上がったからである。少子高齢の現代社会の中に見られるいろいろな子どもたちの歪みや、生活習慣病などが云々されている現代こそ、この本に書かれている江戸人の病気の予防や生活の知恵の一端を学ぶ必要があると思う。

(平成十八年十一月例会)

「わが国初の狂犬病人体用ワクチン開発の経緯」講演
要旨

唐仁原 景昭

一 わが国初の狂犬病人体用ワクチン

わが国において初めてパスツール氏予防注射法を開始したのは、田中丸治平著「狂犬病論」によれば、「当時長崎医学専門学校にて栗本氏初めてパスツール氏予防注射法を開始せり之を本邦に於ける該注射法施行の嚆矢となす」と記載され、また、山脇圭吉著「日本帝国家畜伝染病予防史」において「依つて明治二十八年八月当時の長崎病院内科医